
王子と雌鹿

海城ありあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王子と雌鹿

【Nコード】

N5377Z

【作者名】

海城ありあ

【あらすじ】

ある王国のあるお城で王子の誕生日パーティーが行われています。そこで王妃である母が彼にいうのです『明日の舞踏会で花嫁を見つけなさい』と。まだ自由の身でいたい彼は物思いにふけりながら友人達と鹿狩りへ出かけるのでした。

練習投稿のようなものですので、次回の更新はいつになるか全くわかりませんがいつか完結（6話程度のお話で）させるつもりです。

1 お城の庭園

さっぱりとした青空の下で、ある大きなお城の庭園で大きなパーティーが行われていた。そのパーティーとは19歳になった第二王子の誕生日を祝うものであった。そのためかお金持ちの貴族が目だったが、珍しく城下町にも友好が多い王子であったので、村娘や商人などいろいろな身分の者もたくさん訪れていた。その様子を椅子に座って眺めていた王子は、ため息をついた。

先ほど、この国の王妃である母に言われた事について考えていたのである。

『クリーフス、楽しんでいますか』

村娘達が楽しそうに踊っているのをボーッと眺めていると、どこからともなく母がやってきてそう声をかけてきた。なんともいえぬ笑みを浮かべる母に対してクリーフスは怪訝な瞳を向ける。こういう笑みを浮かべる母は、いつだって何か企んでいると知っているからだ。

『ええ、いつも以上に楽しいですよ』

クリーフスが上品ににっこりと笑うのを見ると母は満足したようにもっていた扇を上品に口元にあてる。そして満面の笑みでこう言うのだった。

『お前もいい歳になったのだから、明日の舞踏会で花嫁を選びなさい』

その瞬間、笑みを浮かべていた顔が凍りついたのを覚えている。母はそういうクリーフスの反応にも満足したように笑い、有無を言わせぬうちに立ち去った。

さっきの事を鮮明に思い出してクリーフスは少し顔をしかめる。どうしたもののか、と頭を抱えた。

母の言いたいことは分かるのだが、まだ結婚とやらをしたくなかった。この国では、早々と結婚するものがあるが、結婚をすると自由でいられる時間が少なくなると聞くし、クリーフスはまだ自由に遊んで居たかったのだ。

良い回避方法も思いつかないので、クリーフスは少し歩くことにした。椅子から立つと近衛兵がこちらを窺っているのを感じたので、護衛はいらないと首を横に振る。少一人になりたかった。母からそつなることを見越した命令が出されているのか、護衛が付いてくる気配はなかった。

「クリーフス!!!」

自室に戻ろうと城の中を歩いていると、後ろから聞きなれた声がしたので立ち止まった。振り向くとそこにいたのは、3人の若い男。いずれも幼い頃からなじみのある友人たちだ。

「やあ、今日は僕のために来てくれてありがとう」

そう言って笑みを浮かべると、3人は少し驚いたように目をまるくしてお互いに顔を見合わせた。クリーフスはそんな友人達の様子に

首をかしげる。何か変な事をしたのだろうか、と考えていると不意に右肩を軽く叩かれた。

「まあ。クリーフスらしいと言っちゃあ、らしいよな」

「は……？」

苦笑いする友人にますますわけが分からない。

「ほんと、ほんと。嫌なくせにさー」

「俺たちにまでそんな顔みせないでくださいよ」

「ごめん？」

わけが分からずに謝るクリーフスをみて友人達は、第二王子としてのプライドはないのかやら相変わらず変わった奴だなどと笑う。3人に詳しく話を聞くと、どうやら結婚の話のことらしかった。母との話を近くで聞いていたらしく、それを心配して3人は追いかけてきたのだと。

「あの時のクリーフスの青ざめっぷりといったら、倒れるんじゃないかって思ったぜ？」

「そうそう！ 嫌味なくらいに綺麗な笑顔が凍りついた瞬間なんてお腹が痛くなりましたよ！」

「あのあとはずっとその変な笑顔張り付けたまんまで不気味だったな！。まさか僕達までその変な顔を見せられるとは思ってなかったけど」

相当な言われようにムツとしたクリーフスは腕を組んで3人を睨んだ。

「仕方ないだろ、考えてたんだから」

何を考えていたんだ？ と楽しそうに笑みを浮かべる3人にクリーフスはため息をついた。

「花嫁探し舞踏会の回避方法を考えていた。お前達も考えてくれよ」

クリーフスは幼いころから自分の立場をあまり考えずに行動することが多い。普通の貴族ならしない様なことをしてみたり突飛もないことをして人々を驚かせる。例えば10歳の時には衛兵の監視の目を抜け出して城下町へこっそり遊びに行き、あるうことが庶民の友人をつくって一日中遊んでいたりした。だからこそ身分という壁を越えて多くの人々と渡り合えることができるのだろう。まあ、良く言えばだが。悪く言えば前後の事を考えない自己中で、その上空気読めない奴だった。と3人の友人達はそれぞれ思いつつなんだかなだ王子の言うことに頷いた。

彼らはもともとそのつもりでクリーフスを追いかけて来たのだ。

「じゃ、気晴らしに森で鹿狩りでもしながら考えようか」

3人の友人の内の1人がそういうとクリーフスは笑みを浮かべた。

1・お城の庭園（後書き）

文章力というものが皆無ですいません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5377z/>

王子と雌鹿

2011年12月18日02時54分発行